

本音を

東日本大震災を受けて、川崎市麻生区の特別養護老人ホーム「金井原苑」のスタッフ有志が「かわさき・健康応援隊」を結成、被災者の「本音」を「支援」につなげる活動を始めた。特に避難所で暮らすお年寄りは遠慮からか、本当に欲しいものをなかなか口にしない。スタッフらは、レクリエーションなどを通じて徐々に本音を引き出し、必要な支援を掘り起こすことにしている。(平木友見子)

活動のきっかけは、スタッフの一人、川内潤さん(三つが四月、被災地のヒアリングボランティアに参加し、被災者と接したこと。川内さんが「困ったことはいくらもありませんか」と尋ねても、「大丈夫」十分です」

今できること
—被災地とともに—

川崎市麻生区の特養のスタッフ



被災地でボランティアをする太田さん(左)

支援へ

の答えばかりだった。遠慮がちに話す被災者の姿に、楽しいことをすれば、心を聞いてくれるかもしれないと感じた川内さんは、苑長に相談し、有志を募って応援隊を結成。スタ

レクリエーションで「遠慮の壁」取り除く

ツフ約二十五人が交代で被災地に入り、レクリエーション活動をすることにした。これまで五回、宮城県南三陸町や気仙沼市の避難所やケアハウスなどを回った。午前二時に同苑を出発、翌日午前零時に戻る日帰りの活動だ。被災地のお年寄りとは体操したり、歌を歌ったりしながら話を聞くと、「冷たい飲み物が飲みたい」「食べたいと思ったものを三カ月間、一度も食べていない」など、次第に本音が漏れ聞こえてくるようになった。介護職員が普段から使っている高齢者を和ませる「技術」が生きた。活動に参加した太田正美さん(五つは「笑ったり、体を動かしたり、普段とちょっと違う時間の流れをつくるのが大切」と話す。被災地には、同苑利用者が織った布巾や手作りの小物などを持って行ったりする。「届けた時の写真を見せると、利用者もすごく喜んでくれる。川崎と被災地のお年寄りのつなぎ役でもあるんです」被災者から聞き出した要望は、自分たちでかなえたり、インターネットサイト「ふんばろう東日本支援プロジェクト」に書き込むことも。「化粧品がなくて、葬式がたたくさんあるのに出席しにく」と漏らした女性の声を大手化粧品会社に伝え支援の輪を広げた。「応援隊に来てもらいたい」という声が多く「手回りきらない」と川内さんは被災地で役に立っている。他の施設にも活動が広がれば」と願っている。